様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：３２６６５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2018
課題番号：２５３７０１８２

研究課題名（和文）アジア舞踊文化圏構想における共通言語の発見と創作舞踊発展のための基盤研究

研究課題名（英文）Basic research for common language discovery and creative dance development in the Asian dance culture area plan

研究代表者
小林　直弥（KOBAYASHI, Naoya）

日本大学・芸術学部・教授

研究者番号：９０３４９９８６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：　日本における舞踊文化の動作、また身体の構成要素を代表する「舞」「振」「踊」は、それぞれ儀式的・宗教的要素、また近世を代表する歌舞伎における手話的動作を含む演劇的な演技要素に加え、人間の本能的な感情表現を体現化させた民俗的な要素から構成され、それに歌詞を伴う音楽が存在し、それを「日本舞踊」の本質的な要素であることを、今回の研究で証明できた。これは今までの先行研究では断言されて来なかったものを、中国、又韓国を中心とした舞踊表現の概念と比較しながら、それが我が国に留まらず、広くアジア圏全体の舞踊圏に存在する共通する要素であることも発見し、「呼吸法」、「間（ま）」の共通性について成果も得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、現在狭義の意味でしか解釈されていない「日本舞踊」における表現法、概念、身体論について、とりわけ中国、韓国の伝統舞踊との比較研究を行いながら、日本舞踊の方法論について確固たる根拠を示した上で、我が国独自の舞踊文化発展のための、日本の舞踊文化の特性、又アジア舞踊文化の共通言語として存在する「呼吸法」「舞（儀式的身体動作）」「振（演技的手話動作と足の動作の連動）」「踊（民俗性の感情表現を含むリズムを伴った身体表現）」の存在を証明した上で、新しい我が国独自の創作法による作品創造の試演と提示によって、舞踊創造に携わる実践者の育成と舞踊創造者への新しい理論による舞踊創造法を提示することが出来た。

研究成果の概要（英文）：This research extracted elements of “Nihon Buyo" or "Japanese dance” that have not been clarified in previous research, and proved that these elements are common to dances in Asia. “Japanese dance” is mainly composed of four elements: First, ceremonial and religious elements such as “mai,” “huri” and “odori,” which are the basic physical movements of dance in Japan. Second, performative elements such as sign language in Kabuki which represent modern theatrical performances. Third, folkloric elements that embody instinctive human emotions. Fourth, some musical elements accompanied by lyrics. These four types of elements together form an essential part of “Japanese dance." Furthermore, compared with dance in China and Korea, these essential elements of “Japanese dance” are common in Asian dances. It was also found that “breathing methods” and “ma,” or brief pauses for breath, are common in Asia.

研究分野：舞踊学

キーワード：創作舞踊　日本舞踊　アジア舞踊文化　舞踊創作法　民俗芸能　創作舞踊詩　舞踊創作理論　舞踊文化比較研究

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（１）我が国の舞踊芸術のあり方

我が国の伝統的な舞踊領域、及びその動作を考察すると、特に中世に始まる能楽、また、近世に始まる歌舞伎やそれに伴い発展してきた狭義の意味で言う「日本舞踊」などがあり、それらは主に「型」と呼ばれるある一定の法則によって定義された身体動作を現代まで継承し、音楽やそれに伴うリズムも含め、伝統的に継承されてきたものを崩すことなく行われてきた経緯がある。

（２）研究の必要性

その上で、日本の舞踊表現を含む芸能の形態やそれに付随する歴史を考察して見ると、主に古代中国や古代朝鮮半島、さらには広く東南アジア諸国における伝統的な舞踊表現や芸能形態に様々な共通点を見出すことが容易にできる。そうしたことを踏まえ、改めて私たち日本人がアジア諸国における身体表現、主に舞踊表現を通じた共通した文化圏、言わばアジアに共通した舞踊文化圏が存在するのではないかということが本研究の出発点にある。

（３）研究の基本概念

そのような意味では今後新しい舞踊創造をしていく環境整備、また新たな表現方法、及び表現理論の構築を進めていく上で、アジアに共通する舞踊文化圏とはどのようなものであるのかを考察し、さらには、日本舞踊を基盤とした新しい舞踊創造の形として「創作舞踊詩」なるジャンルの確立に向けた比較研究を含む実践的な検証および、そこから得ることができたデータ及び方法論を広く社会へ提供することを念頭に置いた研究を開始したものである。

その意味から、本研究開始の当初の目的は、アジア舞踊文化圏構想としての日本における伝統的舞踊動作の概念と方法論を導き出した上で、アジア舞踊文化圏における共通動作（舞踊言語）の発見と日本から発信する新ジャンル（領域）の基盤構想の構築を目標としたものである。

２．研究の目的

本研究の目的として、まず、日本における伝統的舞踊動作の概念と方法論を導き出した上で、アジア舞踊文化圏における共同動作とも考えられる言わば「舞踊言語」なるものの発見と共に、日本から新たに発信される新ジャンル舞踊領域の基盤構想を発見することを主眼に、着想として以下の３つの項目について研究予想結果を想定した。

① アジア各国（本研究では中国及び韓国の伝統舞踊を対象とした）から渡来した各芸能領域に遺伝子的に内在された舞踊表現の根源的意義とその方法論の確認。（特に「舞」「振」「踊」「呼吸」「間（ま）」の根源的用法の共通性についての考察。）

② 我が国の近世の歌舞伎狂言に至るまでの舞踊文化の中で生まれた「型（身体表現の方法）」の抽出から、アジア諸国、とりわけ中国、韓国の伝統芸能に焦点を当て、そこから我が国の伝統的な舞踊表現の「型」との共通性を発見することで、その応用として新しい舞踊創造（具体的には創作舞踊領域）に活かすことができるように応用、発展させる。

③ ①～②の研究作業を基とし、その概念や方法論を用いた作品創造とその試演を含む舞台発表までをその目的とする。

以上①～③を基本的な研究目的とした。言わば、まず本研究では、アジアにおける舞踊文化の共通性から、アジア舞踊文化圏として位置付け、その身体言語としての共通性を見出すことを第一の目的とし、最終的には、新しい舞踊創造、舞踊創作の方法論として、研究成果を活かし、創作作業における身体動作の活用や舞踊スタイルとしての応用を主眼とした真の意味での「日本舞踊」領域の確定と「創作舞踊」領域の明確な方法論に基づく一般化までを想定し、それを目的としている。

３．研究の方法

研究の方法として、まず次のような項目に関し想定をし、それに基づき研究作業を進めた。

① 日本における伝統的舞踊動作及び「型」を細かく整理し、論文としてまとめる。

② 日本人の舞踊動作における身体的及び精神的基盤について一定の定義を発見し、論文としてまとめる。

③ アジア諸国、特に中国、韓国における伝統的舞踊表現と我が国の伝統的舞踊表現の「型」や概念の違いを単に並べるのではなく、双方に共通する要素を考察し、そこからアジアの舞踊文化に共通した身体的特徴を抽出し論文としてまとめる。

④ 研究で得られた成果を活かし、日本から発信することを主眼とした新しい舞踊創作や創造における方法論を定義した上で、それを活用し、実際に実演者（日本舞踊家、日本人ダンサー）に研究成果においてプレゼンテーションを含め理解してもらいつつ、ワークショップの開催、また研究会の実施、そして最終的に本研究の成果を発表する作品上演（研究成果作品上演＝舞台上演及び公演）を行う。また同時に口頭発表による成果発表を行い、広く研究成果を公表する。

以上①～④の研究方法により研究を進め、その都度研究成果について論文化し、又研究発表

などの場合には、パンフレットを作成するなどし、研究成果を広く公表した。

４．研究成果

（１）総合的な概要

これまで我が国の舞踊研究、とりわけ伝統芸術における舞踊領域は、主に能楽又は歌舞伎舞踊、さらには民俗芸能を含む諸芸能との関連性は謳われてきたものの、「日本舞踊」としての一つの舞踊領域における定義が曖昧にされこんにちに至っている。こうした現状にあって、本研究では、まず「日本舞踊とは何か？」という大前提を徹底的に整理し、その舞踊領域としての定義を明確に示した上で、アジアの中でもとりわけ我が国の芸能文化との交流や影響力の強い、中国、韓国（朝鮮半島）における伝統芸能（舞踊）との比較研究を試み、その中で得た相違点や共通点に関して取りまとめた上で、最終的にその要素を取り入れた、日本舞踊の観点からアジア舞踊圏を構想した創作舞踊の制作（本研究では、石井漠の構想との共通性から「創作舞踊詩」と定義し呼称した。）と、作品舞台発表、及び同時に研究成果に関する口頭発表を最終的に実施した。さらに、各研究成果を踏まえた研究論文を大学紀要を中心に段階的に発表し、その成果と過程に関して、学会（舞踊学会ニューズレター・舞踊学会 HP ニューズレター第 12 号（2017.6.17)、表題「日本舞踊を用いた創作舞踊領域の確立に向けた方法論の発見と試論への挑戦」）などにも掲載し研究成果の概要を発表した。本研究においては、基本的に、まず具体的な日本舞踊における舞踊構造において、以下、先行研究でも分析されてきた我が国における伝統的な「舞踊」というものに対する概念そのものを改めて確認しつつ、本研究でさらに具体的に日本舞踊の要素の定義として確認した。

①「舞」＝宗教的・儀式的要素を含む旋回運動を主な動作とし、その意味に合わせた所作を伴う。日本・中国・韓国共にこの身体表現は存在し、アジア圏の舞踊表現に共通する身体表現である。

②「踊」＝民俗的な習俗性を保有した垂直方向への跳躍を代表する身体運動であり、「感情の放出」を含む自然な動作が基本となる。

③「振」＝最も原始的な「物真似」的な動作や「擬態」としての身振りや手振りを内在し、我が国においては、芸能の発展史の中で、技術や表現の向上と発展の中で、様々な「演劇的要素」を含む手話の要素を多く保有してきた。その動きは、中世における能楽の時代を経た後、近世の歌舞伎の時代における「所作事」、所謂演技性を含む舞踊動作となり、それが日本の舞踊芸術の身体表現の基本ともなった。

以上のような、「舞」・「踊」・「振」の三点を基本的な要素として内在するものを「日本舞踊」領域であると定義した上で、その中に、さらにこれもアジア舞踊文化圏に共通する舞踊表現の重要な概念として本研究では定義した、我が国においては「間（ま）」と呼ばれる、音楽における拍子と拍子の間の中に存在する無音域である空間における時間、これは時間や適度な秒数を定義することができないものとして存在するが、この「間（ま）」こそ、アジアの舞踊文化圏に共通する舞踊表現における概念ではないかという仮定と、その確信において研究の中で明らかにしてきた。この「間（ま）」とは、我が国の美学的観念や空間的思想の中で、様々な伝統的芸術・文化、さてまた「道」に代表される世界において最も重要な思考的概念であり、音楽を単なるリズムに合わせて踊るといった単純なものではなく、この「間（ま）」の概念にこそ、まさに舞踊表現の普遍的な定義が存在するということも本研究で明確なものであることが理解できた。これは例えば韓国の伝統舞踊の中における呼吸法、「静（＝息を吸う）・中（＝息を止める）・動（＝息を吐く）」にも共通するものであることは、韓国舞踊との比較研究の中で捕らえられたものであり、また中国における京劇の表現の中にも、歌い出しや動作の出発点の中に、同じような思考が存在することも実証できた。

また、我が国の近代にあって、それまでの伝統的な舞踊表現法や概念から、新しい舞踊創造の新しい形として「自由舞踊」を提唱した石井漠の創作舞踊、また創作舞踊詩に対する思想とその実践は、石井漠が民俗や舞踊本来の目的を研究し創造した領域において、本研究の目的とするところの「創作舞踊領域の確立」について大いに影響を受ける価値があるものであることも研究過程の中で見出すことができ、さてまた日本の近代における日本舞踊家、藤蔭静枝、花柳寿輔、楳茂都陸平をはじめ、二代目市川猿之助他、歌舞伎俳優における舞踊創造、そして大正から昭和にかけて活躍した、石井漠の門弟であった崔承喜の活躍とその後における中国の京劇の名優、梅蘭芳との交流やアジア舞踊文化圏に関する思想など、日本のみならずアジア圏における舞踊表現の概念や方法論としての「舞」「踊」「振」、そして「間」を保有する身体表現要素に、近代以降の西洋の舞踊文化概念との融合の中で、我が国独自の進化を遂げてきた日本の舞踊文化を再考察し、その中からまず「日本舞踊領域の定義」を明確にした上で、新しい舞踊文化芸術としての「日本舞踊を基盤とした創作舞踊領域の確立と提議」を目標とした本研究としては、その成果を最終的に、研究成果を口頭発表として、またその成果を日本舞踊家及びコンテンポラリーダンサーとの共同研究により制作、振付師した作品発表（舞台公演）において最終的にまとめたものである。

（２）研究の実践

具体的な研究の実践としては、以下①～③について実施し、細かな部分においては、日本舞踊の身体表現と動作を確認するために、その前提として、まず日本舞踊における古典舞踊、素

踊りの代表作品である清元「北州」について、日本舞踊家、花柳秀衛氏に研究協力してもらい、その動作を映像収録の上、京劇、韓国舞踊の研究協力者にもそれを視聴してもらいながら、その上で、各企画セッションを考案し代表的なものとして実際に以下の①～③を実施した。

① 京劇と日本舞踊における比較研究の実践

・京劇作品を用いた日本舞踊の手法で製作された作品創作と上演

発表名：舞踊シンポジウム『京劇×日本舞踊−「白蛇伝」をめぐる身体表現の相違点と共通点−』

日　時：2015年１月17日（土）午後１時開演

会　場：日本大学芸術学部江古田校舎小ホール

参画者：蘇東花氏（中国戯曲学院教授）

藤間恵都子氏（日本舞踊家）、

他、日本舞踊家３名

（写真１：試演作品舞台上演）

② 韓国舞踊と日本舞踊のワークショップを通じた比較研究の実践

・ワークショップ名：韓国伝統舞踊の実践（講師：韓国伝統舞踊家、蔡美京氏）

日　時：2018年２月22日（木）午後３時～午後５時

会　場：日本大学芸術学部江古田校舎北棟第６実習室

参画者：蔡美京氏（韓国伝統舞踊家）、

西川奈都歩氏（日本舞踊家）、

他、日本大学芸術学部演劇学科日舞コース学生

（写真２：ワークショップの様子）

③創作舞踊制作及び作品舞台発表（全５作品上演）・口頭発表を通じた総合的な成果発表

・発表名：創作舞踊詩作品展（舞台発表）

日　時：2018年10月７日（日）午後２時開演

会　場：日本大学芸術学部江古田校舎小ホール

参画者：小野ひとみ（舞踊家）、小岩井杏奈（舞踊家）、伊藤咲葵（日本大学芸術学部演劇学科日舞コース）、清田鮎子（ダンサー・日本大学大学院芸術学研究科舞台芸術専攻）、清永千智（日本大学芸術学部演劇学科日舞コース）

口頭発表：小林直弥

（写真３：作品「月下美人」舞台）

以上具体的な研究の実践のほかにも、研究の前半作業としては、まずアジアの舞踊表現における共通性の発見を進めるべく、韓国伝統舞踊における表現、技法を研究する目的から、韓国大使館韓国文化院（東京都新宿区）への取材協力のもと、比較・共通性発見への聞き取りを数度にわたり実施した。特に、韓国伝統舞踊家であり、韓国伝統舞踊「大平舞」の一人者でもある金順子氏にインタビューさせて頂き、さらに同文化院で行われている韓国伝統舞踊のレッスンを見学し、その表現及び技法、そして精神的な概念に関し研究取材を実施した。その一方で、比較し共通性

を探る必要性から日本舞踊、とりわけ古典舞踊の技法のデータ集積の必要から、日本舞踊家、花柳秀衛氏の協力を得て、日本舞踊における表現、また技法に関し、細かく分析した上で、一つ一つの動作・表現を映像記録した。また、同花柳氏には、日本舞踊における古典の名曲である、清元「北州」を踊ってもらい、その動作・振り・表現を映像に記録し、今後共通点を海外に取材した際に容易に説明できるよう映像化し分析をしやすいような工夫を実施した。続いて、次の段階として、韓国の伝統舞踊との比較及び双方の共通性を探る研究と並行し、中国における伝統芸術である京劇の中から特段日本舞踊との表現比較において比較対象としやすい作品として「白蛇伝」を題材として、一ヶ月に数回にわたり日中（京劇×日本舞踊）におけるワークショップを実施し、その中から京劇にも日本舞踊をはじめとする日本の主要な伝統芸能の共通性するものとして「間(ま)」という概念の共有性についての発見に至ることに成功した。とりわけその研究成果は、シンポジウムの開催及び当日パンフレットの意味もなす調査報告によってまとめられ、また日本舞踊家を集め行った日本舞踊による京劇作品の舞踊化は中国のメディアからも取材を受けるなど、今後の研究発展の基盤を築くことかができた。また韓国伝統舞踊との共通性の発見を目的としたワークショップを韓国舞踊家、蔡美京氏の協力のもと実施し、若手日本舞踊家に体験してもらい、その中で得た相違点や共通点に関してデータの集積を行なった。その結果は、最終的な創作舞踊作品の製作にあたって事前に行なった創作・振付に協力してくれた若手日本舞踊家において行なって研究会の実施において検討を行い、その上で研究論文を作成し査読付き紀要論文として成果を発表した。そして、最終的には、創作舞踊の制作を通し、日本舞踊を基盤とした新しい舞踊創造及びアジア舞踊文化圏に共通する要素である「舞」「踊」「振」の要素、そして本研究を通し導き出した「間（ま）」及び「呼吸法」の定義に基づく「創作舞踊詩」の実践としての作品製作（作：小林直弥、創作・振付：参加舞踊家）及び作品発表（舞台公演）、そして同時に行なった口頭研究成果発表を行い、内外に本研究の研究成果を示した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 10 件）

①小林直弥、創作日本舞踊台本と上演記録、創作舞踊詩「トワノウタ」「弥勒」「夏椿-沙羅双樹-」「月下美人」、日本大学芸術学部紀要［創作篇］、査読有、第 43 号、2019、95-103

②小林直弥、創作舞踊の展開　−日本舞踊領域を用いた舞踊創造の可能性−、日本大学芸術学部紀要、査読有、第 67 号、2018、25-34

③小林直弥、創作舞踊における近代舞踊創造の考察Ⅰ−大正時代初期の日本舞踊の創作と海外からの影響−、日本大学芸術学部紀要、査読有、第 66 号、2017、17-26

④小林直弥、創作舞踊試論（二）−日本舞踊を用いた創作舞踊の技法と表現・方法論の構築−、日本大学芸術学部紀要、査読有、第 65 号、2017、45-54

⑤小林直弥、日本舞踊を用いた創作舞踊領域の確立に向けた方法論の発見と試論への挑戦、舞踊学会ニューズレター、査読無、第 12 号、2017、9-10、http://www.danceresearch.ac/newsletter/Newsletter12.pdf

⑥小林直弥、アジアの舞踊表現における共通言語の発見Ⅱ−日本の舞踊における「振」、その意義と役割−、日本大学芸術学部紀要、査読有、第 64 号、2016、11-20

⑦小林直弥、創作舞踊試論（一）−概念の分類整理と身体表現としての方法論の試作を中心に−、日本大学芸術学部紀要、査読有、第 63 号、2016、9-20

⑧小林直弥、創作日本舞踊台本と上演記録　創作舞踊詩「玉響之盆踊　室野洞泉寺版」、日本大学芸術学部紀要［創作篇］、査読有、第 40 号、2016、79-83

⑨小林直弥、芸能行為における〝笑い〟の研究　−日本の舞踊文化とその根源的概念を中心に−、

日本大学芸術学部紀要、査読有、第 62 号、2015、33-42

⑩小林直弥、アジアの舞踊表現における共通言語の発見Ⅰ　−日本舞踊と韓国伝統舞踊における基盤研究としてのまとめ−、日本大学芸術学部紀要、査読有、第 61 号、2015、39-50

⑪小林直弥、日本の舞踊における「間（ま）」の研究　−舞踊言語としての考察−、日本大学芸術学部紀要、査読有、第 60 号、2014、5-12

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計２件）

① 小林直弥　他、日本大学芸術学部、平成 30 年度科学研究費（基盤研究 C）研究成果発表「創作舞踊詩作品展」公演パンフレット、2018 年、P17
② 小林直弥　他、日本大学芸術学部、舞踊シンポジウム「京劇×日本舞踊　-「白蛇伝」をめぐる身体表現の相違点と共通点-」パンフレット、2015 年、P14

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等　無

６．研究組織

(1)研究分担者 無
研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者　特記無
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。